（要約版）

ダン茶（乳茶）と嗅ぎたばこの利用によるモンゴル遊牧民の幸福感の検討

石井　智美（酪農学園大学）

1. 研究目的

ヒトの食において味を判別するのが「味覚」、味を介した好みが「嗜好」とされている。おいしさの判断に関与する物質としてβ-エンドルフィンは、多幸感や至福感を引き起こし、その食べものをやみつきにさせることが知られている。ものを口にしておいしいと言う感覚から『幸福感』が生まれると考え、本研究では「幸福感とはささやかでも、確固とした概念なのではないか」との考えを軸に、モンゴル遊牧民に幸福感をもたらしてきた乳茶と嗅ぎたばこの特徴、利用を検討した。

2. 方法

モンゴル遊牧民の乳茶と嗅ぎたばこの利用、その特性について、報告者がこれまで行ってきたモンゴル国の調査と、比較用としてユーラシア大陸各地での調査の野帳を整理・検討し、検討事項について聞き取りを行うとともに、文献の調査を行った。

3. 結果

(1) 乳茶と嗅ぎたばこがもたらす幸福感

茶、たばこと言った嗜好品はたとえ得ることが出来なくても、ヒトが生きて行く上で影響は無い。しかし無ければ心寂しく渇望感が生まれ、何とかして得られたならばとても嬉しく、満足感を覚えてきた。この満足感が幸福感に繋がるのではないかと思う。そしてヒトにおける『幸福感』とは、名誉や財産を得ると言った大きな事柄に発動されるだけでは無く、厳しい自然相手の遊牧生活において乳茶、たばこなどの嗜好品をしばし得ることで一息つき、安らぎを覚える時間を持つことからも生まれ、厳しい遊牧生活を生き抜いてきたのではないか。ヒトの日常において、こうしたささやかな行為から『幸福感』を得られることはとても重要なのだ。

(2) 乳茶

今日モンゴル遊牧民はレンガ状に加圧、圧縮されたダン茶を砕いて熱湯中で煮出して浸出液に自家のウシの生乳と塩を入れて乳茶をつくる。その飲用量は報告者の調査で成人男性で１日に３Ｌにもなっている。生水を飲む習慣が無く、乾燥した高原に暮らす遊牧民にとって加熱された乳茶は安全で、貴重な水分補給源としてではなく癒しともなってきた。遊牧民にとって飲用する茶に、何らかの乳が入っていることは不可欠なのである。そんな乳茶も、夏季にウマの生乳を発酵させた民族飲料「馬乳酒」が製造

される地域では、その地位を馬乳酒が担い、乳茶の飲用量は減ってしまう。草原に散居して暮らす遊牧民は常に来客を歓迎し、つくりおいた乳茶があっても、新たに作り出来立ての熱い乳茶でもてなす。熱い 1 杯の乳茶は、遊牧民にとってささやかな幸福感をもたらしてきた。これまでの報告者の調査で、モンゴルの一部の地域で乳茶に塩を加えていないことを確認していた。塩を加える地域と加えない地域の分水嶺は東部のヘンティ県、ドルノド県で、ブリヤートモンゴルが多く暮らす地域でもある。ウランバートルから東へ 100 km ほどの川の周辺部が、遊牧民宅によって塩を加えるか否かの地域の最西端になっているようだった。これらの地域はいずれも土壌に微かに塩分を含んでいるのだった。茶に乳を加えるという飲み方はイギリスにおけるミルクティが紅茶に、ウシの乳、砂糖を入れている。同じ乳茶と言う呼称でもその飲用状況は、歴史的な背景もあって用いる茶葉の種類、乳の添加量、塩や砂糖の添加など異なっている。

(3) 嗅ぎたばこ

草原で遊牧民同士が出会うと、手持ちのたばこがあれば勧めて共に喫煙してきた。今日では出会ったヒトと挨拶を交わす儀礼として、粉たばこが入った嗅ぎたばこ入れを交換することが、民族の伝統回帰への関心の高まりもあって盛んになっている。嗅ぎたばこは西洋から東アジアに清朝初期に伝来したとされ、粉たばこの保存容器として鼻煙壺が生まれモンゴルへ伝わったという。この嗅ぎたばこの習慣と保存容器は、モンゴルの知識階級であるラマ僧から広がって行き、1921 年の社会主義化で廃れたが、1991 年の民主化後に復活した。「嗅ぎたばこ入れ」は、モンゴル産鉱石の表面を滑らかな玉状に加工したもの、鉱石やガラスの全面に精緻な彫りを施したものが好まれている。移動生活のため常に財産や貴金属類を可能な形で身に着けてきたことも関与している。嗅ぎたばこ入れの材質などから、交換相手の財力、好みなどもうかがえると言う。最近では香りを嗅ぐ振りをすることで済ますことも多い。

(4) モンゴルにおける香り

モンゴルでは抱き合う挨拶の時、相手の香りを嗅ぐことで相手の状態が変わっていないことを確認してきた。ヒトは身近な香りについては嗜好として寛容である。草原の生活で想起される香りと言えば、ゲルに常に満ちているスモーキーな香りである。こうした香りは、嗅ぎたばこが持ち、微かにダン茶も持っている。民族によって、好ましいとする香りが異なることは当然だが、モンゴルでは、スモーキーな香りが好ましく、近年都市生活者ではウシの糞入りのお香を焚くことで草原を思い出してリラックスすることが盛んである。ヒトは嗅いだ香りから瞬時に、様々な記憶を手繰り、ある種のホッとした思いから満足感が生み出されることで『幸福感』を覚えているのではないかと思うのだ。